

「親鸞に学んだこと」 1

2015年8月15日
NHKラジオ
明日への言葉
2015・7・23

張 偉(チャン・ウェイ)(作家・親鸞研究家)

中国吉林省 長春市生まれ 中国伝統の漢方医の父と看護師との間に生まれた張さんは、文化大革命の時、ごく普通の人々が激しい動乱の中で、非人間的な行いをしてしまうのか、思い悩んできました。救いとなったのは野間宏を通じて知った親鸞の思想でした。張さんは長い歴史の中で、何度も戦争を体験した日本と中国が、未来に向けての友好な関係を築く鍵の一つが親鸞の思想に在ると考えています。20年ほど前、野間宏から親鸞の数々の著作が送られてきました。中国の人々に親鸞の思想、考え方を知ってほしいという思いで、去年、8年かけて親鸞の著作「教行信証」を中国語に翻訳しました。

20年前に日本に留学、名古屋市の大学の准教授として、作家、親鸞研究家として活躍。「教行信証」は沢山の經典の引用の様になって成り立っています。親鸞の独自の訓読と読み換えによって、親鸞の思想を表す書物になっている。中国の漢文で書いた經典は、多様な意味が一文のなかに含まれている。日本語に訳される時に、一つを選ばなければならない。親鸞は独自の読み替えによって、理解をしています。「教行信証」の核心は「他力本願」です。「他力本願」は自他对立の他力ではありません、自力を否定する他力でもありません。自力を包んで、全て抱擁する包み込む大いなる他力です。全て溶け込む大いなる他力です。一滴のしずくが海に落ちるような、自力と他力の関係があります。

「他力本願に帰依する」→何か介在する力にゆだねるのではなく、一滴の水が海に入る様な感じ。親鸞の教えを長く味わっているうちに、言葉を越える大切な感覚が育まれるという事です。「慈悲」の根源的な意味は、子を慈しむ親心で、感謝と痛みや喜びを共有すると言う事です。「同体大悲」悲は他者の命と痛みを共有する事を意味します。全ての命が一つの体になるように、全ての命の苦しみを自分自身の痛みとして感じ、全ての命を苦しみから救いたそうとするおおいなる働きです。絆よりもっとおおいなるもの、おおいなる働きに包まれるような感じです。

野間宏 1982年中国作家代表団の招待で招待されて、日本文学の紹介雑誌を作ると言う事で長春で野間宏の「暗い絵」という作品を中国語に翻訳してほしいと、私(張偉)のところに依頼がきました。(25歳の頃)

戦後文学の代表的な作家、終戦を迎え、日本人の心はいままで信じ込んでいた物を失い、これから何を心の頼りにして生きていくかわからず空っぽになった。日本人の心の頼りを求めて、戦争を体験した文学者たちは文学創作を始めました。(戦後派文学)

「暗い絵」は戦後文学の第一声と言われるが、私はそれを中国語に翻訳し、出版されました。私に親鸞の著作を送ってくれ、自分の文学の中の親鸞を明らかにしてほしいと、私に託しました。

未完の課題を誰かに託さなければならない、最も言い残したいことを誰かに吐露しなければならぬと痛感したようです。野間さんが病気で入院する前に、是非親鸞を徹底的に学んでくださいという手紙をくださいました。

送った論文に対して厳しい怒りの手紙が突きつけられた。野間宏が自分の文学の中の親鸞について触れた初めての言葉であり、最後の言葉であり、野間文学の研究にとってはとても貴重な言葉になりました。

日本の研究者ではなく中国人である私に託されたことであるという事、最も言い残したいことを洋々たる海を越えてはるばる中国大陸にもとめた事、この行動はとても不思議だと思います。

「暗い絵」 ムンクの叫びの絵があるが、其れに似たような感じがあるが、ブリューゲルの絵の持つ暗い痛みや呻き、嘆きに突き上げられるのを感じた、その絵は存在、社会の欠陥をむき出しにし、噴き出し訴える様な、肉体の嘆きの様な、腐敗した大きな腫れ物の様な表情で、痛い傷の痛みの様な調子で、心に一斉に迫ってきたと感じた。言葉を越えて何か訴えている様に感じた。

親鸞の思想は「命の平等、無差別」という大きな考え方。私が親鸞に魅かれたのは文化大革命の体験があったからです。私は少女時代から青春時代にかけて文化大革命を体験しました。文化大革命は文化的な革命を装いながら、裏には凄まじい人間闘争が渦巻いています、毛沢東は自分の権力を維持するために、中国人の中に階級的貴人？(よく聞き取れず)が存在すると主張して、人民に彼らをいじめる権利を与えました。

階級的？にされた人々は毛沢東の政敵、元の地主、文化人みたいな人々。文化大革命の本質は階級的？にされた人々をいじめる運動でいじめは過酷でした。

酷い時には毎日のように殺されたり、自殺したりしていました。毛沢東は10代の少年少女を利用して、彼等に革命を呼び掛けて、毛沢東崇拜の中で育てられた彼らは自発的に紅衛兵を作り、毛沢東の意志に従って物を壊したり、人を殺したりして、集団的に革命的に行動しました。

故郷 長春は旧満州の時代、14年間日本人と一緒に働いたり生活していたりしましたので、文化大革命の時代に日本人との関係で、糾弾されたり、自殺に追いやられたりしたものが多かったです。私の父もその中の一人で、病院で医師として勤務していましたが日本語が達者だったこと、旧満州の時代に日本人の法律事務所に務めたこと、日本人とともに病院を経営したと理由で、日本のスパイとして糾弾されることになりました。

父は医者職を奪われ、肉体労働をさせられ、怒鳴られたり殴られたり家にも戻って来た父の身体は傷だらけで、刃の様に私の心に刻み込まれ、いつまでたっても消えることはありません。父親の心にもっとも深い傷を付けたのは、私なのです。当時小学生でして、日本のスパイの娘としていじめられ、うつうつとして、ついに或るとき家で爆発しました、どうしてこの家に生まれたのか、革命家の家に生まれればよかったのにと叫んで、家から飛び出しましたが、その間際に見た父の顔は今も心が痛みます。私は苦しみから逃げようとしてすべてを怒りを父にぶつけた、外の圧力に恐々としていた父にはさらに内側から圧力を加えることになりました。それは父親を自殺未遂に追い詰めた原因の一つになったのです。文化大革命は人間の深い闇を見せつけましたが、文化大革命をリードした人、実際に人を殺した人の闇だけではなく、わたし自身の闇をも思い知る事でした。